



日 ば 土 場 あ

ママをいきかう人たちのパラパラシンケン物語

2016.3 第5号

特集 生活を支える

養島 豪智 副院長 館澤 謙蔵 ソーシャルワーカー 大迫 晋さん ねこのて訪問看護ステーション 所長
宮崎 章造さん 京都市北部障害者地域生活支援センター らしく ソーシャルワーカー

京都岩倉の歴史を訪ねて

日本赤十字看護大学 名誉教授 武井 麻子さん
日本赤十字看護大学 准教授 鷹野 朋実さん
大阪府立大学 人間社会学部 教授 中村 治さん

ご本人の安心感を軸とした支援体制づくり

京都市中部障害者地域生活支援センター「なごやか」 山縣 知佳さん

あさ目覚め 今日の出会いに 胸躍る

就労継続支援B型施設「いきいきいわくら」 河本 俊章さん

NPO法人Salut 就労継続支援B型事業所 サリュ 「サリュは心の休憩所」

医療法人 稲門会

いわくら病院



対談

心の病気を

もつ方の

生活を

支える

—— 今回は心の病気を持つ方の地域での生活を広くサポートしておられるお一人に参加して頂き、「ご本人と地域での生活、また病院との関係を考えていきたい」と思います。

大迫さんと宮崎さんはお二人とも在宅の心の病を持つ方を訪問されて、医療と福祉の面から支援されておられますが、病院との関わりはごうされていますか？

大迫：そうですね、担当のソーシャルワーカーや看護師さんと退院の時期や状態の変化など、こまめに面会して話し合いをするようにしています。

宮崎：支援センターが出来た頃から長期入院の方が退院されるという退院支援が多かったので、まず入院中から何度も足を運び、信頼関係を築き、退院してグループホームに入居されてからも相談のり、グループホームを出て一人暮らしになられたときにもずっと関わって行くことが出来るように入院中から関係を作っています。

病院での姿と 地域生活の中での姿

宮崎：在宅と入院時の姿が全然違うことがあるという話なのですが、例えば在宅時に夜一人でお部屋におられて幻聴がガンガン聞こえてとても苦しい状態だった方に、以前入院されていた病院に再入院してもらったことがあります。そうしたら次の日その病院でこの方を昔からよく知っておられたスタッフの方が怒って支援センターに電話をかけてこられて「なんでこんな、ちっとも病状が悪くないのに入院さすんや」と仰ったんです。つまり病棟に居られる

特集

生活を 支える



袁島 豪智
Taketomo Minoshima
副院長

ときには幻聴などの症状は全く出ていないというところなのです。それで、すぐに退院となるのですが一人でお家に帰られるとやっぱり夜に酷い幻聴に悩まされる。こちらからするところなんでも直ぐに退院なんや」「夜中に幻聴により怒鳴ったりして近隣の住民と揉めているの」と思っています。まいますが、病棟での姿と自宅に戻られた姿がいつも一緒ということはありません。

支援センターも病院もどちらも片一方しか見えていない場合があるので、その意識のすり合せは時間のかかる難しい問題だと思えます。

● 〇〇のようにして入院に至ったのかという背景を軽くみる、あるいは見過ごしてしまっている。今、宮崎さんがおっしゃられたようなことが容易に生じていると思います。入院されている方の中には、個別の、生活環境上の困難がまず先にあって、そのことが症状悪化に繋がっているという方々もおられます。この場合、入院にいたった背景を省みないまま、症状が落ち着き本人も退院したいと言っているから、退院してもらいました。そこだけ見れば地域に退院してよかった、本人の生活のしづらには残されたままです。で、再び生活がうまくいかず、病状が再燃してしまいます。度重なる

入院は本人が地域で過ごす時間を減らしてしまっています。経済的な負担が増え、生活の勘がなくなるなど不利益を被ります。そうならないために入院前の生活や地域との関係を配慮し、退院後の地域での生活をよく想像して入院ケースワークしていきたいと思っています。毎回うまくできるわけではないのですが……。

● 〇〇主治医をしていて、ベックリするようなタイミングで「本人から退院するわ」と話があったら「いつですか」と聞いて「今日です」と言われて本当に驚くこともあるんです。



基本は本人の思いを尊重したいと思っています。ですけど、地域で上手く行かないからその入院であり、入院中に介入を求められていた課題についてまだ関係者との調整ができていないときもあり、退院のタイミングを迷うことがあります。実際、時期尚早に思えてもうまくいかなかったら、準備万端になつてからと思っているうちに入院が長期化して退院が難しくなることもあります。お互いの連携がいつ必要かと思っています。

地域で暮らす ことを意識する

● 〇〇僕自身も病院の中で働いているときは、その方の地域生活を全然イメージすることが出来ませんでしたし、退院されるにしてもどういった資源を使ったらいいのかイメージすることが出来ないまま仕事をしていた時期がありました。

● 〇〇病院スタッフがよく知っている社会資源の一つにグループホームがあります。しかし、グループホームに入居するということは、実はそう簡単なことではないんです。グループホームは生活の場ですので、医療スタッフは常駐していません。入居者は日中は就労B型やデイケアなどに通所してもらいます。夜はたいして世話人さんが一人おられるだけです。自立をめざしていく場所なので、住み続けることはできません。そういった地域の実情などを病院のソーシャルワーカーはスタッフに伝え続けていかないとけないと思っています。

● 〇〇最近ではグループホームに入られる方と一緒に病棟の看護師さんが見学に来られることもあります。地域での生活に関心がある看護師さんが居てくれる事はありがたいです。グループホームなり、作業所なりの施設を見て頂く

ことも重要なのですが、そこでご本人さんがどういった生活をされているのかということを中心に見て頂くことを重視したいです。

また退院してアパート暮らしをしている方のご退院入院しておられる方が見学に行くこともありますし、そういった時に看護師さんも一緒に見に行くことが出来たらより退院してからの生活をイメージ出来るのではないかなと思います。

背景にある問題への 糸口としての「症状」

看護師：暮らしを知る事は症状を理解する上でとても大切だと思います。「症状」はご本人と環境との間に生じている問題の本質をご本人とその周りに伝えてくれる重要なメッセージという見方があります。特に急性期には症状が目立ちますが、実はその急性期こそがご本人と環境の間の問題を色濃く映し出される場面であると思います。病気があつて最終的には病状と言つて出てしまつても、そこに至るまでにはその方なりの困り事がある訳で、表向きの症状にとらわれずにその背景にある事を普段支援されている方から教えて頂き連携しながら、ご本人と一緒に話し合つて探り解消していく事を大切にしたいと思つています。

大迫：僕は看護師として関わりながら、気づいてこの人はこんなな荒れているのだなと考えることがありました。よくよく観察している中で電球のスイッチが切れていても症状に出る人もおられますし、テレビの接続が上手く行かないとか、ストーブの芯が切れて寒かったなど、実際その人の生活空間に入って、温度や光や部屋の状況を見て困りごとを察して支援することで、それが直ぐに治まったというような経験をしました。

訪問するたびにその方の困っているところを一緒に



大迫 晋
Susumu Osako

ねこのて訪問看護ステーション 所長
看護師

実感して一緒に解決していくんだと思います。

実生活のイメージ 作りが大事

看護師：また長期入院の方をどうしていくのかという問題もありますね。症状が治まっても退院出来ない方をこちらと共に、病院の医師や看護師やスタッフと温かく背中を押して退院につなげていくという役割もあるのではないのでしょうか。

看護師：長期入院になっている方に「退院されて地域の中で自由な生活をされてはいいですか」と声をおかけしても、なかなかご本人の気持ちは動かない。一方で、こちらもどのようにしていけば地域生活への橋渡しにつながるか、分からない面もあるんです。

大迫：長期で入院されている方も先に退院された方のアパートや、生活を見て、自分もこんなことが出来るのかなとイメージすることが大事だと思います。実生活のイメージが長期入院をしていると持てなくなつてしまつてます。外の生活が凄く怖い、病院にいれば安心するということ方もお

られます。

もともと上手く行かない挫折感の積み重ねがあり長期入院に至ることも多いので、例えば病棟のスタッフの中でも親しい人と一緒にアパートを探しに行くとか、ソーシャルワーカーも交えて3人で探しに行くとか、そういったことが大事な関わりだと思います。

例えばタバコはここに売っている、好きな食べ物はこの店に来たらあるとか、新しく住む環境のイメージも大切ですし、困ったときに相談すればいいかということも事細かにコミュニケーションしていけば安心につながっていくのではないのでしょうか。

ご本人の意思の尊重

看護師：過去に館澤さんが担当されていた方がおられたのですが、京都に住んでおられた方で、突然関東に引っ越しすると仰つて、僕たちはみんな驚きました。

しかもお方には身内やお知り合いも全くおられない。自分で不動産業者と契約をされて、今住んでいる家を引き払うための準備や段取りをしている途中に調子が悪くなり、それで入院されたのですが、入院中にその京都の家も引き払われてしまいました。

その結果、病院から退院される時には見えず知らずの関東の新区に退院するしかなく、実際退院されたのですがその新区のマンションは空っぽの部屋があるだけでどうしようという感じだったので、退院の日に僕が新幹線で一緒に転居先まで行きました。転居届の手続きや年金の手続き、家具、家財道具の買い出しや、ガスや電気のごこまで一緒にして日帰りで帰って来たのですが、今考えると自分でもよくやったものだと思います。





宮崎 彰造
Shozo Miyazaki

京都市北部障害者地域生活支援センターらしく
ソーシャルワーカー (PSW)

宮崎…いきなり退院して関東に住むというところは遠いこと
だと思えます、退院して元の生活に戻ることも難しいのに、
知らない土地で、知っている人もいないのに、やらないと
いけないことがいっぱいある。
普通だったら「関東なんて、無茶です」と言っていて諦めて
もらう方を選ぶと思うのですが、「ご本人の意思を尊重し
て思い切ったサポートされたところ」が凄かったと今でも思
いますね。
宮崎…ときどき今でもその方から電話があるのですが「な
かなか上手く行かんわ」とか「またちょっと調子くずして
入院してるねん」と仰っておられて、やっぱり大変なのは
大変なんだろうなあと思います。それを聞くときでも僕ら
のやったことは良かったのかどうか考えるときもありません
よ。



失敗する権利



宮崎…僕らも生きるので大変です。病気を抱えていて、
病状が出て辛い思いをされることもあるだろうけれど、そ
うならないように先回りしすぎるのはどうかかなと思いま
す。長期入院の一因になっていることもあるかもしれませ
ん。

失敗する権利の取戻しという方もおられますが、今の
話を伺って大変なのだろうけれど何はともあれ自分の思っ
たように生きておられるわけだし、凄いいことだなあと感じ
ました。病院は入院された方が失敗しないように心配し
すぎたり、その失敗によって地域、社会にもたらされる影
響への責任を問われているように思ったりしますが、
そこにいつの間にか自分自身が縛られ過ぎてしまっている
のではないのでしょうか。そこを飛び越えて、「ご本人の意思
に寄り添って思い切ったことをやってみる」ということがな
かなか出来にくくなっているように感じることがあります。
世の中の流れも多少はあるけれど自分たちでやり控えて
いるところもあると思えますし、そこを乗り越えていかな
いといけないのではないかと最近思います。



舘澤 謙蔵
Kenzo Tatesawa

急性期治療病棟
ソーシャルワーカー (PSW)

宮崎…生きていくのは大変です。病気のあるなしに関わら
ず、誰もが生きていくなかで、苦勞は苦勞として、楽な
ことは楽なこととして、その人に固有のこととして現れま
す。解決できることは解決できるし、解決しようのないこ
とは解決しようがないのです。支援者がたやすく苦勞を
取り上げたり、肩代わりしないで、同じ場で一緒に悩ん
だり考えたり話し合ったりする時間を大切にしていきたい
です。

大道…本人が困ったときや失敗したときに一緒にちゃんと
考えてくれる支援者というのが大事だと思いますね。声
を聞いて一緒に振り返る、次はこうしようかという案を
ご本人と一緒に考えることが重要なのではないかと思いま
す。

宮崎…そうですね。きっと答えはご本人の中にしかありま
せん。決して支援者側が押し付けられるのではなくて一緒に
考えることだと私も思います。そのためにも、ぜひ地域で
支援されている方々には、これからも遠慮なく感じたこと
を教えて頂けたらと思います。

また、改めて思うことなのですが、もう一度基本に立
ち返りご本人の仰ることに耳を傾けて、その思いを伺うと
いうことを大切にしたいです。その思いに沿ってご本人と同
じ方向を向いて皆さんと一緒に活動出来たら面白いだろ
うなと思います。

本日は皆さんお集まり頂きありがとうございました。

京都岩倉の歴史を訪ねて

日本赤十字看護大学名誉教授
武井麻子



医学書院 webマガジン「かんかん!」より転載

8月20日、京都岩倉村大雲寺周辺を訪れた。主な目的は、いわくら病院の開放処遇を実践している急性期病棟を見せていただくことだったが、病院見学会に先立ち、以前、看護の学会で岩倉大雲寺の家族看護の歴史について特別講演をされた大阪府立大学の中村治先生に、古い歴史をもつ周辺の神社仏閣や精神障害者を預かつて治療したといわれる保養所などを案内していただくことになった。

遠くに比叡山を望む緑豊かなこの一帯は、古代の高天原から神々が石の船に乗って地上に降りてこられたという原始信仰の遺跡、石座（いわくら）神社を始めとして、多くの神社やお寺があり、ここで療養し心の病が癒されたという内親王の陵墓や古くからの謂れのある地蔵尊などがあちらこちらに遺っており、そうした歴史と文化の中で現在のいわくら病院の治療文化が育まれてきたことが実感できた。

しかも、城守保養所を訪れて、歴史上のものと思っていた保養所がそのままの形で保存されていることにも驚かされた。百聞は一見に如かずとはこのことである。教科書で知っていたのは、ごく一部でしかなかったのだ。こういうところこそ、世界に誇るべき文化遺産だと思ったが、個人所有ゆえに土地建物の管理が難しく、今や存続は風前の灯となつてしまつてゐる。

里子制度といひ、どこかできちんとこの貴重な歴史を保存し、伝えていってほしいものだと思つた一日であった。



1



2



3



4

この取材は2015年8月におこなわれたものです。

1. 京都市左京区岩倉 石座(いわくら)神社鳥居
2. 目無地蔵
3. 石座(いわくら)神社境内
4. 岩倉陵・実相院宮墓参道

病棟にお邪魔すると、折しも、夏の高校野球決勝戦の真っ最中。ホールでのテレビ観戦で盛り上がり上っていた入院患者の皆さんは、ほんの一瞬、私たち来訪者の方に目を向けて軽く会釈すると、またテレビへとゆっくりと視線を戻す。そのさりげない対応に、何とも言えない居心地の良さを感じた。職業柄、多数の精神科病院を訪問してきたが、病棟に入るやいなや、患者さんたちが駆け寄ってきて、自分の周囲に、我先にと話す賑やかな人集りができてしまう、という経験を幾度もしてきた。彼らの多くは、「誰も自分の話を聞いてくれない」「スタッフが関心を向けてくれない」といった不満を日常的にもつ人々である。このような病棟では大抵、スタッフや患者さんたちの大声、怒声、奇声も飛び交



日本赤十字看護大学 准教授
鷹野朋実

っている。いわくから病院では、人集りができることも、大声や怒声、奇声が聞こえることもなく、私は穏やかな空気に包まれていた。そこには、「もし私に何か困りごとが生じれば、テレビを観ている患者さんたちが助けてくれるだろう」という、不思議な安心感さえあった。ふと、これが精神科医療における治療的環境として言われるところの「居心地の良い無関心」なのではないかと思った。そして、いわくから病院の患者さんたちがこの雰囲気を感じ出す「治療者の技」を持っているのは、いわくから病院のスタッフから口伝、そのような「技」を提供されているからなのではないだろうか、そのように感じた。

HISTO



わたしは武井麻子先生と鷹野朋実先生の岩倉案内人として、いわくから病院の病棟に入れていただいた。『洛北岩倉誌（1995年刊）』を作ること依頼され、調べているうちに、精神障害者預かりが岩倉の歴史に占める大きさに「気づき、岩倉における精神障害者預かりについて調べてきたが、いわくから病院の病棟に入れていただいたのは、今回も含め、まだ2度だけである。開放医療と言っからには、たしかに病棟の入口が出入り自由になっている。問題を起こす可能性が高

く、勝手に出てはいけない人が入っている病棟でも、自由になっている。そのような人が勝手に出てしまう可能性は排除できないと思うが、そんな時に備えて、対策もとられているようである。それでも開放医療の基本は信頼関係にあると思った。わたしたちが通りかかった時の患者さんたちと医療関係者の間のやりとり、患者さんたちがわたしたち訪問者に対してとる接し方にそれが表れているように思う。地域、病院、医療関係者、患者の間の信頼関係、互恵関係がなければ、地域における持続可能な開放医療は成立しえないし、そのような信頼関係や互恵関係は一朝一夕にできるものではないとわたしは思っている。それと同じく、病院内においても、医療関係者と患者の間に信頼関係がなければ、開放医療は成立しえないし、いわくから病院における医療関係者と患者の間の信頼関係は、長い時間の積み重ねによって得られたものだと思った。



大阪府立大学 人間社会学部教授
中村 治



ご本人の安心感を軸とした 支援体制づくり

京都市中部障害者地域生活支援センター「なごやか」
相談支援専門員／精神保健福祉士／社会福祉士

山縣 知佳

京都市中部障害者地域生活支援センター「なごやか」(以下「支援センターなごやか」という)は平成10年に中京区に開設し、障害のある方やそのご家族が地域で生活していくために必要な支援を行っています。私は平成17年から勤務をしています。当時は、京都市の委託事業であった「退院促進支援事業」の自立支援員として入職し、制度や施策が日々目まぐるしく変化する中で、現在も精神科病院へ長期に入院されている方の退院支援に携わらせていただいております。

退院支援とは、退院を「ゴール」として目指していくのではなく、「ご本人が地域で安心して生活し続けていくための基盤づくりを目指していくもの」と考えています。退院への不安を和らげながら緩やかに地域へ移行していけるような仕組みが大切だと思います。

平成26年度の精神保健福祉法改正に伴い、精神療養病棟へ入院中の方に対して退院支援委員会を設置することが規定され、出席者の中には地域の相談支援事業者も含まれています。求められる支援が多様化・複雑化する中で、地域の相談支援事業者の業務も多忙になってきており、全てのケースに対し十分な対応ができるだけの余裕はない状況ではありますが、「ご本人の安心感に繋げることを大切に、既存の仕組みも活用しながら日々支援に取り組んでいます。

ご本人の地域生活を支えていくためには、退院後も引き続き病院との連携は欠かせませんが、連携を図る上で「顔の見える関係づくり」を大切にしています。ご本人が希望する支援を行うためにも、報告・連絡・相談がスムーズにできる体制を構築し、柔軟な対応に繋げていくことが必要となります。

それぞれの機関が日々多忙な業務に追われ、ご本人に寄り添った支援に十分な時間を取れなくなってきた状況ではありますが、ご本人を中心とした

COOPERATION

支援チームの中でより良い支援を目指して今後も取り組んでいきたいと思っております。

【地域移行支援の流れと支援内容】

どなたでもご利用いただけますが、まずは病院のスタッフなどにご相談ください。利用料は無料です。退院を希望されている方へ、それぞれの希望に沿って退院に向けたお手伝い(住まい探しや生活用品の買い物、手続きへの同行等)をさせていただきます。退院したあとも安心して暮らし続けていけるように支援させていただきます。

【お問い合わせ】

・京都市こころの健康増進センター

TEL: 075・314・0355
FAX: 075・314・0504

・京都市中部障害者地域生活支援センター「なごやか」

TEL: 075・813・0503
FAX: 075・813・0520

または各区保健センター、京都市障害者地域生活支援センターまでご相談ください。



京都市中部障害者地域生活支援センター「なごやか」

障害のある方やそのご家族の方が地域で生活していくために必要な支援をしています。「相談ごとをうまく話せない」「こんなことを相談してもいいの?」といったことでも、遠慮なくご相談ください。



『いきいき・いわくら』での仕事

あと目覚め

今日の出会いに胸躍る

河本 俊章

平成23年10月に就労支援B型施設「いきいき・いわくら」が立ち上がりました。

最初は、病棟の各部屋のシート交換と掃除から始まりました。シート交換のやり方を看護学校の学生さんや経験があるスタッフに教えてもらいながら何度も何度も練習しました。

今は、休止していますが、大原の畑で草取りや収穫のお手伝いをしたり、野菜の販売もしました。

やがて、ドイツ製のステンドグラスを加工して、イヤリングやピアスの制作も始まりました。今では、写真立て、ろうそく台、ブックメーカー、箸置き、髪留めなど、レパートリーも増えてきました。

寮の各部屋のメンテナンス、共有部分の掃除、草取り、民間アパートの共有部分の掃除など、病棟の掃除で習得した技術が生かされています。

包装の内職も主流の仕事の1つになっています。色々な工程があるので、巻きの〇〇さん、包装の△△さん、梱包の□□さんなど、各自が得意分野を担当して、全体として効率的な仕事を目指しています。

1ヶ月に1回〜2回、洛北ブルーージュさんのパンを販売します。コンピューターでの注文の集計、パンの包装、レジの担当、接客など色々な仕事があります。

初めて体験する仕事に慣れるには、少し時間がかかりますが、教えてもらいながら、丁寧に作業することを心がけます。また、色々な仕事を体験することにより、自分に合った仕事が見つかります。

私は週3回、就労支援施設を利用してしています。私の大切な居場所です。午前中に2時間、午後2時間作業をします。2時間が通しではなく、間に10分間の休憩時間があり、忠実に守るように指導されています。10分間の休憩を取ることで、集中力が保てます。

お昼休みは1時間で、病院の患者さんと同じ栄養バランスが取れた昼食が提供されます。

IMPORTANCE OF



就労継続支援B型施設 「いきいき・いわくら」

働くみんなが「いきいき」出来れば、周りのみんなも「いきいき」出来る！障害者自立支援法に基づく就労継続支援B型を提供しており、「生産活動」を通じて精神障害をお持ちの方の「働くこと」「現在と将来の生活」を支える事を目的とした施設です。それぞれのペースで活動に取り組み、「いきいき」とした日々を過ごしていただける様、職員一同、応援しています。

【いきいき・いわくら連絡先 075-711-2011】

毎週1回、就労後、皆で施設の掃除をします。気持ちよく仕事ができる美しい空間を保ちます。施設関係者の努力やメンバーの創意工夫などによって、支給される工賃も当初の2倍程になり、働く意欲の向上につながっています。

『いきいき・いわくら』の命名にも関わりましたが、就労支援施設で働く機会に恵まれたことに感謝しています。

週に1日、2時間からの利用も可能です。気楽に施設の利用を始める仲間が増えるといいと思います。

「いきいき・いわくら」を卒業して、「一般就労に就く人もいます。私も自分に合った仕事に就く機会に巡り合えればと思います。

「あと目覚め 今日の出会いに 胸躍る」一晴れた日の朝は、いきいきと自転車で施設に向かいます。

NPO法人 Salut 就労継続支援B型事業所 サリュ

「サリュは心の休憩所」

サリュではこころの病気を持つ女性たちがア
クセサリーやバッグ、ポーチなどの商品、七
宝焼き・つまみ細工・縫製など、ひとつひとつ
つ手作り制作しています。集中力を必要と
する細かな作業も多いですが、各々のレベル
に合わせて、工程ごといろいろな人の手が加
わりながら作っています。サリュは商品の製造
販売を通し、社会とのつながりを感じ、いき
いきと生きられるために活動しています。

2002年に二条城近くの京町家で、共同
作業所サリュが開所されました。今年1月か
らは、作業所と共にお店も始めました。京町



右上：伝統的な七宝焼きのイメージにとらわれないカジュアルでモダンなSippoシリーズ。
左上：サリュ外観。1Fはショップ 2Fで作業が行われます。
下：京都の職人さんによって染められた正絹を使用したつまみ細工 Tsumamiシリーズ。



サリュメンバー
杉下 桂子 さん

家を使った場所なのでオシャレでとても雰
囲気がいいんです。サリュのメンバーは女性
だけなので女性が過こしやすい場所というこ
とをいつも考えています。

サリュではいつもは10人から15人程のメン
バーで作業をしています。商品のデザインは
専属のデザイナーが担当し、専属のスタッフ

と共に素敵な商品を一つ一つ作っています。
流行に左右されることなく、長く愛用しても
らえるシンプルなもの。手に取るたび、使っ
たばに思わず嬉しくなったり、わくわくする
ようなものづくりを私たちは目指していま
す。また、私たちが一緒に活動してくれる新
しいメンバーにも出会いたいですね。

商品の販売は、各種イベントでの販売と、
お問い合わせに応じて販売をしています。サ
リュからは、もつとサリュの商品をいろいろ
所に持って行って、お客さんと直に触れ合っ
て販売する機会が増えるといいなと思ってい
ます。



私には子供が二人いるのですが、子供が小
さな頃から私が度々入院することがあり、家
族に迷惑をかけてきました。でも8年前にこ
こで働きだしてから一度も入院していな
いんです。これはサリュのおかげやなと家族も
みんな言っています。きつこで働いている
と生活リズムが生まれることが理由じゃな
いかなと思います。いいリズムがこにはあっ
て、こに来ると心が休まるんです。仲間も
いるし、楽しい会話もみんな出来るので、
サリュは私にとって心の休憩所です。

サリュ
〒602-8155
京都市上京区
千本丸太町下ル主税町1172
TEL 075-812-2132
<http://www.salut.her.jp>

編集後記

今回は、当事者の生活に焦点を当てた特集に
なりました。当院に入院される多くの方は精神
障害と言う特性を持たれており、病状が悪化す
ると日常生活にも影響が出てしまい結果入院に
至る方も少なくありません。入院時に見せる症
状のみにとらわれず背景にまで目を向け支援す
る事が大事なこととは言ってもありません。し
かし、これが案外難しい。病院は入院前その方
の普段の生活を知らない事が多いので、どうし
ても表面の症状にとらわれがちになってしまう
からです。従って入院前からご本人の生活に寄
り添い支援されている方達としっかり連携を取
っていく事で初めて背景に気付く事が出来ます。
今回の特集を通して、改めて地域でご本人の生
活を支えている関係者の皆様との連携が何より
も大切であるとの思いを新たにしました。

表紙作品および挿絵紹介



ペーパークイリングとは、欧州では500年
以上の歴史があるペーパーアートです。細い紙を
巻いて渦巻き型のモチーフを作り、モチーフ同
士貼り合わせて装飾図案を作る手芸です。
作者の方は2014年夏に偶然目に触れた
クイリング作品が持つ艶や多様な色彩に惹か
れ、また自身のインスピレーションをそのまま紙
に伝え、表現し得るクイリングに心を解き放つ
ことができました。
多くの作品がありますが、一つひとつがどれも
これ以上のもは作れない作品です。
今回は、多くの方がご存知の「竹取物語」の一
場面です。月から舞い降りているのか、月に帰っ
ていく姿なのか？ それぞれの方が、いろんなか
ぐや姫の場面を思い浮かべながら見て頂ければ
と思います。

医療法人 稲門会

いわくら病院

日本医療機能評価機構認定病院

〒606-0017 京都市左京区岩倉上蔵町101 ☎ 075-711-2171 FAX 075-722-7898

<http://www.toumonkai.net>